



TITLE:

攻撃力と抵抗力を表す形容詞--主体性という概念をめぐる--

AUTHOR(S):

仲本, 康一郎

CITATION:

仲本, 康一郎. 攻撃力と抵抗力を表す形容詞--主体性という概念をめぐる--. 言語科学論集 1998, 4: 69-81

ISSUE DATE:

1998-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/66941>

RIGHT:

攻撃力と抵抗力を表わす形容詞

—主体性という概念をめぐる—¹

仲本康一郎

京都大学

e-mail : Koichiro.Nakamoto@ma2.seikyoku.ne.jp

1. 力学形容詞とは何か? —「攻撃力」と「抵抗力」を表わす形容詞

これまでの語彙意味論の研究で、動詞については、その項構造やイベント構造の研究をとおりてかなりきめの細かい分類が可能になった。これに対して、形容詞に関しては、まだあまり研究が進んでいないのではないだろうか。本稿では、日本語の形容詞から力学的な認知（攻撃と抵抗）を反映する語彙のクラスについて観察・記述していく。²

1.1. 力学形容詞の定義

本発表では、意味論的に力学的な認知に基づいて規定される形容詞を“力学形容詞”と呼び、それらの統語的／意味的な記述を行う。力学形容詞は、以下のように認知的／言語（意味論）的にそれぞれ感覚のモード、項構造に基づいて規定される。³

(1) 力学形容詞の認知的／言語的定義：

①身体的な圧力感覚によって規定される形容詞

②二つの項を持ち、その二つの項の間にある種の力関係が成り立っている形容詞⁴

(2) 力学形容詞の例：

かたい／もろい／やわらかい、重い／軽い、きつい／ゆるい

強い／弱い、厳しい／優しい、(難しい／易しい)

1.2. 力学形容詞の二つのタイプ —主体形容詞と対象形容詞

力学形容詞は、意味論的に見ると、おおざっぱに、主体性の高い名詞句を主語にとり、主語の“攻撃力”を表わす「主体形容詞」と、主体性の低い名詞句を主語にとり、主語の“抵抗力”を表わす「対象形容詞」に分けられる。⁵

(3) a. 主体形容詞： 「厳しい」「強い」「甘い」「冷たい」⁶

b. 対象形容詞： 「かたい」「重い」「きつい」

¹ 本論文は、関西言語学会第23回大会で発表したもの(1998b)に加筆訂正したものである。

² 現在、空間認知、力学認知、量の認知の三つを言語に関わる重要な認知システムであると考えている。

³ 力学形容詞は、意味拡張に関して同様の特徴的なふるまいをする(仲本 1998c 参照)。

⁴ Langacker (1995:52) は、力学形容詞に相当する hard などの形容詞は blue などの他の一般の形容詞に比べて、“相互作用的な (interactive)” 意味を持つと言っている。

⁵ 攻撃力／抵抗力は、物理学の用語では、それぞれ「作用」「反作用」にあたる。

⁶ 「甘い」「冷たい」は、「彼女は彼に甘い／冷たい」のような主体形容詞の格パターンを持ち、この場合意味的にも力学的な解釈が与えられている。

1.2.1. 「主体性」について

ここでいう“主体”は、森山(1988:201)のいう「主体性」にならって定義したい。

- (4) 主体性: 動詞がその表わす動きを発生・成立させるための、主語名詞(あるいは動作主名詞)の動きに対する自立的な関与の度合い
- (5) 主体性の段階性: 人間動作主>有情物動作主>経験者>自然的発生

「動詞」だけでなく「形容詞」の意味論でも、主語名詞の「主体性」を考慮することが必要となることがある。形容詞の主体性は、これまでも「感情形容詞」の“主観性”の問題として、また、「温度形容詞」の研究(影山 1980⁷)などでも議論されてきた。

ここでは、形容詞の「動作主性」を「主体性」として議論していく。一見、形容詞の意味論には、動作主やイベントの概念は不要なのではないか、と考えられる。しかし、力学形容詞は定義上、二つの項の間の力関係を表わし、その力関係はフレームとして喚起される特定のイベントが生起する可能性(アフォーダンス)を表わす。⁸ 例えば、「このせんべいはお年寄りにはかたい」という文では、主体(=動作主)である「お年寄り」が、対象である「せんべい」を、「かむ」や「食べる」等の行為が生起しにくいことを表わす。このとき、主語名詞「せんべい」の主体性は低い、あるいは、形容詞「かたい」は対象形容詞であると考えられる。

1.2.2. 主体形容詞 — 「攻撃力」を表わす形容詞

主体形容詞は、意味論的に主体性の高い名詞句を主語にとり、「主体」の「相手」に対する“攻撃力”を表わす。ここでは、「厳しい」を例にとって、主体形容詞の主語名詞に対する意味的な制約を観察してみたい。「厳しい」は、生理的/心理的/社会的な意味での攻撃力を表わす。

(6a) では、「寒さ」「おやじ」の生理的あるいは心理的/社会的な攻撃力を表わしているといっているだろう。これに対して、(6b) は解釈が困難である。これは、主語に立つ名詞句の「主体性」によっている。つまり、「攻撃力」を表わす「厳しい」などの主体形容詞は、「寒さ」や「おやじ」のように主体性の高い名詞句に対しては“攻撃力”という解釈を与えるが、「パン」や「電話」のように主体性の低い名詞句には自然な解釈を与えられないのである。

- (6) a. おやじ/寒さが厳しい b. ?パン/電話が厳しい
- 参考) ?うちの子は厳しい

ところで、「うちの子は厳しい」という文は、上の議論に反して、解釈しにくいのではないだろうか。これは、「うちの子」という表現が、フレームとして「親」と「子」というペアを喚起するためだろう。つまり、親子関係において、親が子に主体的に(この場合「厳しく」)働きかけることはあっても、子が親に主体的に働きかけるという状況は想像しにくいためであると考えられる。ここから、主体性、あるいは、意味役割という概念は、純粋に意味論的な概念でというより語用論的に解釈されるものであるということがわかる。

⁷ 影山 (ibid.53-78) は、温度形容詞には「冷たい」のような対象の温度を描写する「物体温度表現」と「寒い」のような主体の感覚を描写する「生理温度表現」の二つがあると主張している。これらの分類は、主語名詞の主体性のうち、「経験者」と「刺激」の対立によっている。これに対して、本発表では、同じく主語名詞の主体性でも、イベントの“動作主”と“対象”との対立について言及している。

⁸ こうした、力学形容詞に見られるアフォーダンス的解釈については、仲本 (1998c) を参照。

主体形容詞は、表層の格パターン (=構文⁹) から見ると、二項形容詞としても用いられる。このとき、イベントを想定したときの、「主体」と「相手」の関係は、次のような格パターンで表わされる。

(7) <主体>が<相手>に 形容詞

(8a) (8b) は、それぞれ主体である「お父さん」「お母さん」が、「(子どもに) 接する」などの行為を想定したとき、その相手である「子ども」に心理的/社会的な圧力 (=攻撃) を大きく/小さくかけることを表わす。

- (8) a. お父さんは子どもに厳しい
b. お母さんは子どもに優しい

1.2.3. 対象形容詞 — 「抵抗力」を表わす形容詞

これに対し、対象形容詞は、一般に主体性の低い名詞句を主語にとり、(主体の働きかけに対する)「対象」の(「主体」への)「抵抗力」を表わす。また、対象形容詞の場合、「主体」および「主体の攻撃」は背景化されている。ここでは、「かたい」を例にとって、対象形容詞の主語名詞に対する意味的な制約を観察してみたい。「かたい」は、基本的には「物理的」な抵抗力を表わすが、「心理的」「社会的」な意味領域にも拡張して用いられる。(9a) は、主体の物理的な働きかけに対する「このパン」の抵抗力を表わし、(9b) は、主体の社会的な働きかけに対する「あの先生」の抵抗力を表わしているといえよう。

- (9) a. このパンはかたい b. あの先生はかたい

ここで、対象形容詞は、意味的に主体性の低い名詞「パン」だけでなく、主体性の高い「先生」のようなヒト名詞も主語にとっているという問題が生じる。これは、意味論的な制約ではなく、語用論的な解釈の問題として解決される。つまり、(9b) の「先生」は主体性を持って働きかける「主体」としてではなく、主体的な働きかけ (例: これまでの方針を変えてほしいとの要請) を受ける「対象」として認知されている。¹⁰

対象形容詞は、表層の格パターンの点から見ると、基本的には一項形容詞である。しかし、力学形容詞はその定義上、二つの項の間の力関係を表わすため、抵抗力を受ける主体 (=経験者)、あるいは、多くの場合同じことであるが、イベント (=主体の働きかけ) を想定したときの主体を言語の表層で表わすことも可能である。¹¹

このとき、対象と主体の関係は以下のような格パターン (構文) で表わされる。

(10) <対象>が<主体>には 形容詞

⁹ 本稿では、格パターンを Goldberg (1995) のいう「構文」と見なし、特定の意味とリンクされていると考える。ここで挙げたガーニという格パターンは、動詞にも同様に見られ、「かみつく」や「甘える」などの「対面動作」の構文的意味を持つ (寺村 1982: 87-101)。

¹⁰ このような、主体性が低い名詞も主体性が高い名詞も主語に立つことができるという対象形容詞の性質には、「ヒトからモノへ」というメタファーによる意味拡張の方向性が関与しているものと思われる。

¹¹ 抵抗力を与える「イベント主体 (=動作主)」と「感覚主体 (=経験者)」が同一であるのは、対象形容詞に固有の特徴である。主体形容詞の場合、攻撃力を与える「イベント主体 (=動作主)」と「感覚主体 (=観察者 (後述))」は異なっている。

次の(11a)は、主体である「お年寄り」が「せんべいをかむ」という行為に対し、対象である「せんべい」から物理的な抵抗力を受けることを表わし、(11b)では、主体である「子ども」が「この荷物を持つ」という行為に対して、対象である「この荷物」から物理的な抵抗を受けることを表わしている。¹²

- (11) a. このせんべいは(お年寄りには)かたい
b. この荷物は(子どもには)重い

1.3. 力学形容詞の主体性によるグレイディエンス

ここでは、主体形容詞から対象形容詞までを連続的に整理してみたい。そのさい、主体形容詞のプロトタイプ、対象形容詞のプロトタイプを以下のように考える。

(12) 主体形容詞のプロトタイプ:

- ①主語名詞=主体性《高》 ②力の性質 =攻撃力

(13) 対象形容詞のプロトタイプ:

- ①主語名詞=主体性《低》 ②力の性質 =抵抗力

ここでは、対象形容詞「かたい」「重い」「きつい」の三つについて、その主体性の度合いを議論したい。まず、主語名詞の主体性の観点から考察する。(14)は、「かたい」「重い」「きつい」の基本的用法(=物理的用法)である。「かたい」では、主語名詞「せんべい」は想定される行為(かむ、食べる)の「対象」であるが、「きつい」では、主語名詞「ベルト」は想定される行為(締めつける)の「主体」と見なされる。これに対して、「重い」は、それらの中間的な性格を持つ。例えば、bの例文では、「荷物」は行為(持つ/運ぶ)の「対象」と見なされるが、b'では、「ふとん」は行為(=のしかかる)の「主体」と見なされる。¹³

- (14) a. このせんべいは かたい
b. この荷物は 重い
b' このふとんは 重い
c. このベルトは きつい

こうした傾向は、これらの形容詞の副詞的用法からも伺える。「きつい」や「重い」に比べて、「かたい」の場合、同様の状況を副詞的用法で表わすことは困難ではないだろうか。これは、主語名詞の主体性の問題であり、これらの主語名詞が何らかの行為の「主体」として解釈されるかどうか起因しているものと考えられる。

- (15) a. ?せんべいが かたく XXX
b. ?荷物が 重く XXX
b' ふとんが 重く のしかかる
c. ベルトが きつく しめつける

¹² 対象形容詞において主体を明示する「～には」は、英語の不定詞主語を表わす for にあたり、イベント主体(=動作主)の導入という機能がある。

¹³ 「かたい」も、「ベッドがかたい」のような場合、主体の攻撃力を表わすと言っていいかもしれない。

次に、力の性質の観点から考察する。(16)は、「かたい」「重い」「きつい」の派生的用法(=心理的・社会的用法)である。「かたい」と「重い」では、主語名詞「鈴木さん」「佐藤さん」は対象と見なされており、力の性質も、別の主体の心理的・社会的働きかけに対する「抵抗力」を表わしている。これに対して、「きつい」では、「山田さん」は主体と見なされており、力の性質も「抵抗力」ではなく心理的・社会的な「攻撃力」を表わしている。

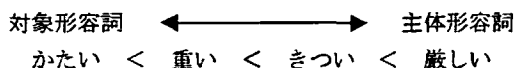
- (16) a. 鈴木さんは 頭がかたい
b. 佐藤さんは 腰が重い
c. 山田さんは 目つきがきつい

また、次の(17)は、主体形容詞の格パターンに対する容認度を表わしている。主体形容詞の格パターンを容認するということは、すなわち、意味的にも主体形容詞に特有の解釈(攻撃力)を持つと考えてもいいだろう。

- (17) a. =せんべいが 歯に かたい
b. ? 荷物が 背中に 重い
c. ベルトが 腹に きつい

このような例から、力学形容詞は“主体性”に関して、次のように段階的に構成されていることがわかる。

(18) 力学形容詞の主体性(力の性質)



1.4. 主体性に関して中立的な形容詞 — 「強い」と「弱い」

力学形容詞のなかには、主語名詞の「主体性」に関して、どちらにも偏っていない中立的な形容詞も存在する。以下の、「強い」「弱い」はその例である。

- (19) a. ゴリラは強い b. 今日は風が弱い
(20) a. この靴は強い b. ナイロンは熱に強い

(19)では、「主体」である「ゴリラ」「風」の攻撃力を表わしているのに対し、(20)では、「対象」である「この靴」「ナイロン」の抵抗力を表わしている。つまり、これらの形容詞は、主語に立つ名詞句の意味論的/語用論的な性質によって、合成的に攻撃力にも抵抗力にも解釈されうる。これは、「強い」と「弱い」が力学形容詞のなかでも最も客観的な判断を表わす形容詞であることに起因しているものと思われる(飛田他 1991:367)。

1.5. 観察表現と感覚表現

ここでは、力学形容詞のうち、主観的な身体感覚「圧覚」によって規定される「圧覚形容詞」と、そうでない、より客観的な(多くの場合、「視覚」に基づく)判断に基づいた力学形容詞の違いについて述べる。前者を“感覚表現”、後者を“観察表現”と呼ぶことにする。

「かたい」「重い」「きつい」などの対象形容詞はどれも、われわれの圧覚に基づく感覚形容詞であり、基本的に観察表現として用いることはできない。

- (21) a. [聞き手がせんべいを食べている状況]? そのせんべいはかたいね
 b. [聞き手が荷物を持ち上げている状況]? その荷物は重いね
 c. [聞き手がベルトしている状況]? そのベルトはきついね¹⁴

これは、「かたい」「重い」「きつい」などの圧力感覚の経験は、外からの観察によっては判断できないためであると思われる。これは、感情形容詞が一般に「あなたはうれしいね」という発話者以外の主体を主語にした表現ができないことと似ている。¹⁵これに対し、「強い」「厳しい」などの主体形容詞は、圧力感覚に基づいているというより、視覚的な、つまり、より客観的な観察に基づいていると言っているといえよう。例えば、ロープを引っ張っているという状況を観察して、「そのロープは強いね」ということには全く問題がない。この場合、発話者は、感覚の“経験者”ではなく、“観察者”の立場に立っているからだと思われる。

ところで、対象形容詞で、力を感じる主体、あるいは、力を受ける主体が言語表層上、明示されないのは、これらの形容詞が単なる属性について述べているからではなく、主体＝発話者であるという自明性があるためであると思われる。逆に、「強い」「厳しい」が、「先生は生徒に厳しい」や「ナイロンは熱に弱い」のように、言語の表層に圧力を与える主体も、圧力を受ける相手も明示することができるのは、これらの形容詞が主観的な感覚表現ではなく、より客観的な観察表現であるからであろう。

2. 力学形容詞の力動学モデルによる表示

2.1. 力動学モデルとは何か?

力学形容詞に体系的な意味表示を与えるのに、本稿では Talmy (1985) の“力動学モデル Force-Dynamics” (以下、FD と省略) を採用する。Talmy (1985) の FD は、二つの物体のぶつかり合いに関する人間の基本的な認知パターンを表わしたもので、認知スキーマのなかでもかなり体系化が進んでいる。具体的には、「物体の力の行使」「そのような力への抵抗」「そうした抵抗の克服」、さらに「抵抗を取り除いた状態」等が FD を用いて表示できる。しかし、扱われている対象は、主として、動詞に関わる、使役、アスペクト、モーダルなどが中心で、本稿で扱う形容詞や前置詞¹⁶については全く言及がなされていないか、わずかの例が取り上げられているに過ぎない。まず、FD の具体的な枠組みについて紹介する。FD は、(運動)生理学の用語である AGONIST (AGO)、ANTAGONIST (ANT) という二つの基本概念を適用して、二つの物体のぶつかり合いのさまざまなパターンを表示できるようになっている。Talmy の枠組みでは、以下のように定義されている。

- (22) AGO : = 初期傾向 (後述) を保有する物体
 ANT : = AGO と反対の力を行行使する物体

¹⁴ 「きつい」の場合は、「かたい」「重い」の場合よりは、自然かもしれない。

¹⁵ どちらも、「そうだ」という観察表現のマーカーを付加するとよくなる。

¹⁶ 高尾 (1992) では、英語の前置詞 against をとりあげ、その意味が空間関係だけではとらえられなく、力学的な関係も同時に表わしていると述べている。

また、AGO の持つ内在的な初期傾向、AGO と ANT のぶつかり合い (=相互作用) のあとの結果状態に関して、「運動」「滞在」の二つを区別している。ただし、初期傾向 *tendency* や結果状態 *resultant* という用語は注意すべきである。これらの用語は、「初期」「結果」でわかるように、アスペクト的な局面の推移を表わしているのだが、より厳密には、意味論的に含意されると考えるべきである。その意味で、これらはそれぞれ「潜在的な傾向」、「実現状態の含意」と呼ぶべきであろう。また、AGO と ANT のうち、どちらの力が強いかは、「力のバランス」として、AGO が ANT より強い場合と ANT が AGO より強い場合を区別している。

(23)

力学的対象

AGO: 大きい○

ANT: 白抜きの]

結果状態

運動状態: ➞

滞在状態: ⊖

内在的な初期傾向

運動傾向: >

滞在傾向: ○

力のバランス

強い対象: +

弱い対象: -

[Talmy 1985:297]

具体例を見ていこう。以下で示す例は、「安定状態 *steady-state*」のパターンと呼ばれ、FDで最も基本的なパターンである。

(24) a. The log kept lying because of the ridge there.

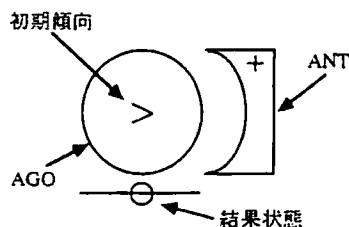
b. The ball kept rolling despite the *stiff* grass.

c. The ball kept rolling because of the wind blowing on it.

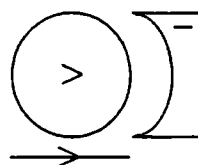
d. The shed kept standing despite the *gale* wind blowing against it.

(24')

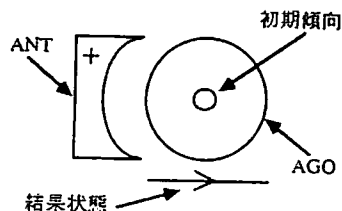
a.



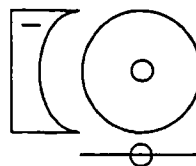
b.



c.



d.



[Talmy 1985:298]

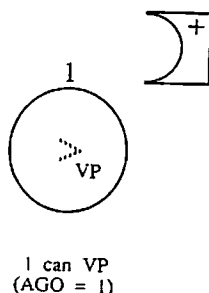
(24a) は、AGO である「丸太」は、はじめ運動する傾向にあったが、ANT である「窪み」のために、結果として滞在する状態となることを表わしている。これに対し、(24b) では、AGO である「ボール」は、はじめ運動する傾向にあり、ANT である「かたい芝生」にも関わらず、結果としても運動する状態を保つことを表わしている。

(24c) は、AGO である「ボール」は、はじめ滞在の傾向にあったが、ANT である「風」のために、結果としては運動する状態となることを表わしている。これに対し、(24d) では、AGO である「小屋」は、はじめ滞在の傾向にあり、ANT である「強い風」にも関わらず、結果としても滞在する状態となることを表わしている。

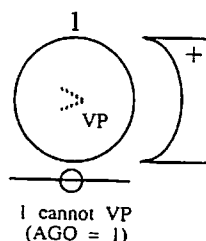
ところで、後でわかるように、力学形容詞は他の多くの力学概念と異なり、結果状態を含意しない。そこで、唯一 FD の意味表示で「結果状態」を含意しない、助動詞 can の表示を以下に示しておく。

- (25) a. A flyball can sail out of the stadium.
b. A flyball cannot sail out of the stadium.
(25')

a.



b.



[Talmy 1985:323]

(25a) は、主語にたつ AGO が動詞句 VP で表わされる初期傾向を持つとき、それを妨げる障害 ANT は存在しない、あるいは、取り除かれているということの意味する。¹⁷これに対し、その否定形である (25b) は、主語にたつ AGO が動詞句 VP で表わされる初期傾向を持つとき、障害 ANT によって妨げられることを意味する。ここで興味深いことは、can は肯定形ではその結果状態が不定なのに対して、その否定形では結果状態が定まっているという点である。

こういった表示の違いは、次のような例文の適格性に基づいているためであろう。(26a) のような肯定形では、初期傾向として、「行こうと思えば、行くことができる」ことを意味するだけで、結果状態として「行く」ことや「行かない」ことを含意することはない。これに対し、(26b) のような否定形では、潜在的に「行くことができない」ことは、結果状態として「行かない」ことを含意する。したがって、(24b) にあるように、「行くことができない。しかし、行った」という表現は不適格になるのであろう。¹⁸

¹⁷ 助動詞 can や cannot の FD 表示では、運動傾向が点線で示されている。これは、「もし、AGO が運動傾向 VP を遂行すれば」のように、意味的に運動傾向が「条件的」であることを表わしている。力学形容詞の表示においても、初期傾向（後述）は点線で表示される。

¹⁸ ただし、can の意味が主語の能力ではなく、心理的圧迫あるいは社会的要請などの外的な要因に基づく可能性を表現している場合はこの文の解釈も可能となる。

- (26) a. I could go there and I went there.
 a' I could go there but I didn't go there.
 b. I could not go there and I didn't go there.
 b' ? I could not go there but I went there.

2.2. 力学形容詞のFDによる表示

2.2.1. 意味役割とイベントパターン

力学形容詞の表示を行うにあたって、ここまでで見てきたFDのモデル要素を、Talmy (1985)とは少し違う(が、彼の議論との整合性は保たれている)かたちで規定しておきたい。まず、力学形容詞では、AGO と ANT は主体形容詞、対象形容詞の“意味役割”として一般化され、それぞれ以下のような対応を示す。

(27) 力学形容詞の意味役割

	主体形容詞 ＜主体＞が＜相手＞に	対象形容詞 ＜対象＞が＜主体＞には
ANT=力を与える物体 主格で表わされる	攻撃の ＜主体＞	抵抗の ＜対象＞
AGO=力を受ける物体 与格で表わされる	攻撃の ＜相手＞	抵抗の ＜主体＞

次に、FDの初期傾向に対応する概念として、力学関係の判断の前提となるイベントパターンの二つのタイプを意味論的/語用論的に設定する。前提となるイベントパターンは、初期傾向と同様、AGOのなかに表示された○や>で表わす。○は、「ANTがAGOに働きかける」ことを表わし、>は、「AGOがANTに働きかける」ことを表わす。

(28) 力学形容詞のイベントパターン

- ① ANTがAGOに働きかける場合(=攻撃力) …主体形容詞 >
 ② AGOがANTに働きかける場合(=抵抗力) …対象形容詞 ○

例えば、「あの先生は厳しい」のような文では、主体であるANT(「あの先生」)がAGOに働きかける。これに対して、「この肉はかたい」のような文では、別に存在する主体(多くの場合、AGO)がANT(「この肉」)に「かむ」などのイベントのかたちで働きかける。本稿で提案した概念で言い換えると、前者の場合が“攻撃力”、後者の場合が“抵抗力”となる。

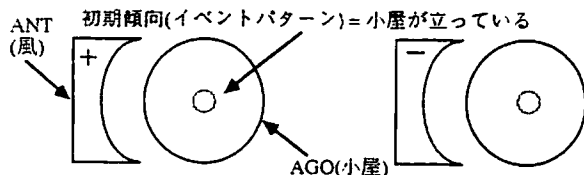
2.2.2. 力学形容詞のFDによる表示

力学形容詞は、「安定状態」のパターンから結果状態を除いた、上のような表示で表わせる。ここでは、先ほどの「安定状態」の四つのパターンと対照させるため、例として「かたい芝生」「強い風」などの例を用いた。

(29) 力学形容詞のFDパターン

a. ANTの「攻撃力」が大

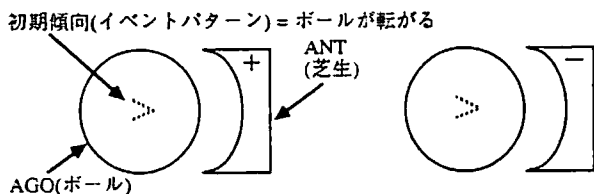
b. ANTの「攻撃力」小



: 主体形容詞

c. ANTの「抵抗力」が大

d. ANTの「抵抗力」小



: 対象形容詞

主体形容詞の場合。(29a)の図は、「風が強い」などの文における「強い」の力学スキーマを表わしたものである。この力関係を逆にしたのが(29b)の図で、「風が弱い」などの文における「弱い」の力学スキーマを表わしたものである。これらの表示は、イベントパターンとして、ANT(風)がAGO(小屋)に働きかけ、その結果、AGOはANTからの「攻撃力」を受けるということを図示している。

対象形容詞の場合。(29c)の図は、「芝生がかたい」などの文における「かたい」の力学スキーマを表示したものである。この力関係を逆にしたのが(29d)の図で、「芝生がやわらかい」などの文における「やわらかい」の力学スキーマを表示したものである。これらの表示は、前提となるイベントパターンとして、AGO(ボール)がANT(芝生)に働きかけ、その結果、AGOはANTからの「抵抗力」を受けるということを図示している。¹⁹

2.2.3. 力学形容詞の意味論的特徴

本稿の記述から、力学形容詞の意味は、Talmy (1985)のFDではまだ扱われていないが、以下のような性質を持つFDのパターンのひとつであることがわかった。

第一に、力学形容詞は、意味論的に「初期傾向」のみを表わし、「結果状態」は含意しない。例えば、「この石はもろい」という文では、石を割ろうとした場合、「こわれる」ということを語用論的に含意するが、意味論的には含意しない。なぜなら、「この石はもろいが、手では割れない」という発話が可能だからである(=却下可能 cancelable)。

第二に、力学形容詞は、意味論的に「初期傾向」は「条件的」である。例えば、「かたい」の反対概念である「この石はもろい」という文は、潜在的な力関係を表わしているだけで、初期傾向としてイベントが生起するかどうかは意味論的に示されていない。つまり、何らかのイベントが起こるかどうかは「不定」あるいは「条件的」なのである。²⁰

¹⁹ ここでは、Talmyの安定状態のパターンと平行させた例文を用いた。

²⁰ これは、前提となるイベントパターン>や○を点線で表示することによって示される。

第三に、力学形容詞は、意味論的に力を受ける AGO を背景化し、力を与える ANT が焦点化している (=主語に立つ)。このことは、それぞれの力学形容詞の無標の格パターンからわかる。おそらく、攻撃力にしても抵抗力にしても、力学的エネルギーを持つものが目立つ (salient) ためではないだろうか。Talmy (1985) では、こうした特徴を持つ FD パターンは「使役」に特有のパターンとして、AGO を焦点化する「モーダル」のパターンから区別されている。

3. まとめと応用

3.1. 本稿のまとめ

本稿では、まず、力学形容詞における「主体性」という概念について考察した。その結果、力学形容詞は、大きく主体形容詞と対象形容詞に区分されること、さらにその区分は離散的なものではなく、連続的に構成されていることを見てきた。また、力学形容詞のなかでも、身体的な圧覚に基づいて規定される形容詞と、客観的な観察に基づく力学認知を表わすものがあることを示した。次に、この分類に基づき、Talmy の力動モデルによる力学形容詞の表示を試みた。その結果、本稿で扱った力学形容詞は、FD のモデルではまだ扱われていない、かつ基本的な力学パターンであることがわかった。

3.2. 本稿で提案した概念の応用

3.2.1. 形容詞の「主体性」という概念 — イベント形容詞への応用

本稿で提案した形容詞の主体性という概念は、力学形容詞を体系的に示すのに役立つだけでなく、その他の形容詞にも適用可能な概念である。ここでは、イベント形容詞という形容詞について、その主体性を議論してみたい。イベント形容詞とは、言語表層上ではモノやヒトを修飾しながら、意味的にはイベントを修飾する形容詞のことを指す。²¹ 例えば、行為の難易度を表わす「難しい」「易しい」、行為の時期や速度を表わす「はやい」「おそい」等は、代表的なイベント形容詞である。以下の例で、a の文を解釈するためには、主語名詞（「論文」「選手」）から行為（「読む」「走る」）が喚起され、全体として b のように解釈されなければならない。²²

- (30) a. この論文は 難しい／易しい
 b. この論文を読むのは 難しい／易しい
 (31) a. あの選手は はやい／おそい
 b. あの選手が走るのは はやい／ おそい

このとき、動詞に対する主語名詞の意味役割が異なることに注目したい。前者では、「論文」は「読む」の対象であるのに対して、後者では、「選手」は「走る」の主体である。こうした、主語名詞の意味役割は、それぞれの形容詞が制約を与えているものと考えられ、本稿で提案した主体性という概念で説明できる。つまり、一般に行為の難易度を表わす形容詞は対象形容詞、速度や時期を表わす形容詞は主体形容詞と考えると一貫した説明ができる。

²¹ このように、形容詞の意味タイプを、修飾する名詞の意味に基づいて分類する方法があるが、これまで、こうした分類基準は、形容詞の分類に適用されたことがないのではないだろうか。

²² その証拠に、イベントや行為を一義的に喚起しにくい場合、例えば、「この星は難しい／易しい」「あの石ははやい／おそい」などは解釈が困難ではないだろうか。

3.2.2. 形容詞のFDによる分析の応用 —もうひとつの力学形容詞

また、力学形容詞は一般に、攻撃力にしても抵抗力にしても、力を及ぼす ANT を焦点化すると主張した。しかし、これとは対照的に、同等の状況に対して、力を受ける AGO を焦点化する“もうひとつの力学形容詞”もある。例えば、感情を表わす「苦しい」「つらい」などの形容詞は、力学認知を反映する語彙のクラスとも考えられる。例えば、話し手 (AGO) が荷物 (ANT) を持っているという状況では、焦点化の違いにより二つのタイプの表現が可能である。力を及ぼす ANT に注意を向ける場合、本稿で扱った力学形容詞が用いられるが、力を受ける AGO に注意を向ける場合、もうひとつの力学形容詞である「苦しい」「つらい」が用いられる。

- (32) a. [ANT を焦点化する場合] 荷物が重い
b. [AGO を焦点化する場合] わたしは苦しい／つらい

つまり、これらの形容詞は、力学認知という観点から、本稿で取り上げた力学形容詞と焦点化のしかたの異なる「双対な」カテゴリーであると言えるだろう。²³

参考文献

- Croft, William 1991. *Syntactic Categories and Grammatical Relations – The Cognitive Organization of Information*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Fillmore, Charles J. 1982. "Frame Semantics." In The Linguistic Society of Korea (ed.) *Linguistics in the Morning Calm*, 111-137. Seoul: Hanshin.
- Gibson, James J. 1979. *The Ecological Approach to Visual Perception*. Houghton Mifflin.
- [古崎敬他 1985. 『生態学的知覚論—ヒトの知覚世界を探る』, 東京: サイエンス社.]
- Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions – A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: The University of Chicago Press.
- 飛田良文, 浅田秀子 1991. 『現代形容詞用法辞典』, 東京: 東京堂出版.
- 影山太郎 1980. 『日英比較 語彙の構造』, 東京: 松柏社.
- 小矢野哲夫 1985. 「形容詞のとり格」, 『日本語学』, 4 (3), 21-28.
- Langacker, Ronald W. 1995. "Raising and Transparency." *Language* 71, 1-62.
- 初山洋介 1994. 「形容詞『かたい』の多義構造」, 『名古屋大学日本語日本文化論集』, 2, 65-90, 名古屋: 名古屋大学留学生センター.
- 森田良行 1988. 『基礎日本語辞典』, 東京: 角川書店.
- 森山卓郎 1984. 『日本語動詞述語文の研究』, 198-224, 東京: 明治書院.
- 仲本康一郎 1998a. 『力学的形容詞の認知言語学的考察—アフォーダンス的解釈をめぐる』, 修士論文, 京都大学.
- 仲本康一郎 1998b. 「攻撃力と抵抗力を表わす形容詞—主体性という概念をめぐる」, 第23回関西言語学会発表資料.
- 仲本康一郎 1998c. 「アフォーダンスに基づく発話解釈—力学形容詞はなぜ行為の難易度を表わすのか」, 第1回語用論学会発表資料.

²³ この場合、FDで一貫した表示をするには、FDのモデルに焦点化という「注意の分配」を表わす表示が必要になるだろう。

- Pustejovsky, James 1995. *The Generative Lexicon*. Cambridge: The MIT Press.
- 佐伯胖, 佐々木正人 (編) 1990. 『アクティブ・マインドー人間は動きのなかで考える』,
東京: 東京大学出版会.
- 新地綾 1997. 「形容詞〈重い〉の多義性に関する認知言語学的考察」, 『言語科学論集』, 3,
77-104, 京都大学.
- 篠原俊吾 1993. 「形容詞と前提行為—Tough 構文とその周辺」, 『実践英文学』, 43, 87-100.
- 高尾享幸 1992. 「力動的前置詞 against の意味構造と拡張」, 『上智言語学会会報』, 7, 60-96.
- Talmy, Leonard 1985. "Force-Dynamics in Language and Thought." *Papers from the
21st Regional Meeting of Chicago Linguistic Society (Part 2)*. Chicago: Chicago
Linguistic Society, 293-337.
- 寺村秀夫 1982. 『日本語のシンタクスと意味 I』, 東京: くろしお出版.
- 山梨正明 1995. 『認知文法論』, 東京: ひつじ書房.